

ジュニア賞

## 集まれ！「ミツバチの町」

七瀧 舞華（高校2年生：京都府）

アリの仲間でも日本にも約4000種以上もいるハチ。その中で私は、ミツバチに注目した。年間4700億円はミツバチの日本における経済的効果の試算である。国内のハチミツ売上は213億円（2015年）。それ以上に私たちの生活を支えている働きが、農作物の受粉である。世界の食料の9割を占める100種類の作物種のうち、7割はハチが受粉を媒介していると国連環境計画（2011年）が報告しており、生態系に重要な役割を果たしている。ハチがいなくなればイチゴやアーモンド、ナシなどの野菜や果物が売り場の棚から消えてしまう恐れがある。

このような現状で、飼育されているミツバチと野生のハチが過去数十年にわたり減り続けていると国際連合食糧農業機関からの報告がある。その主な原因としてオニコチノイド系農薬の使用や自然林の減少などが挙げられている。また、日本の養蜂家は高齢化による後継者不足が問題になっている。

そこで私は、プレイヤー（事業者）が養蜂家になり、ハチミツを効率的に採密することで、売上を競うだけでなく、社会や環境にどれくらい貢献できるか学ぶ事ができるアプリゲームを考えた。例えば日本では花が咲く季節に合わせて巣箱と一緒に日本を縦断する手法と移動しない手法がある。移動することによって、日本中の果樹農家の受粉作業を手伝うことで、農家との共生関係を学ぶことができる。しかし、ハチを移動させることは、交通費・宿泊費などの経費がかかり、ハチにも負担がかかるリスクがある。移動しない手法は、採密できる期間が限られており、地域の田畑にレンゲの種を蒔くなど蜜源を作る仕掛けも必要だ。プレイヤーがどの地域を選び、養蜂の手法を組み合わせるかがポイントで、勝負は売上と環境にどれだけ貢献したかで競うのである。

ビジネスと環境問題を競い合いながら学ぶことができるこのアプリゲームで、ミツバチに興味を持って頂けることを期待する。